手島孝先生に感謝の思いを捧げる

総合管理学部長
久　間　清　俊

手島孝先生は、1992年４月の本学部の設置準備委員会発足から中心的役割を果たされ、1994年（平成６年）３月に九州大学法学部教授を退官され、４月に熊本県立大学総合管理学部初代学部長に就任されました。そして、昨年2000年（平成12年）８月、熊本県立大学長を任期満了での退職と同時に、総合管理学部教授を退職されるまで、８年と５ヶ月間、総合管理学部の発展ために指導的役割を果してこられました。総合管理学部という、日本でも初めての学部の基礎を確立するために、いかほど心血を注がれたか、想像に絶するところであります。

この間の手島孝先生の大学における御仕事は、たんに総合管理学部の創設と発展にとどまりません。熊本県立大学そのものの発展のためにも多大の御尽力をなされました。1994年（平成６年）９月、第８代の熊本県立大学長に就任され、以後２期６年間学長をつとめられました。この間、1998年（平成10年）４月、総合管理学部を基礎とした大学院、アドミニストレーション研究科（修士課程）の設置、2000年（平成12年）４月、同研究科の博士課程の設置、同年４月、生活科学部の環境共生学部への改組と、つぎつぎと大学の発展の施策を遂行されてこられました。その他、総合管理学部と熊本大学法学部、熊本学園大学商学部・経済学部との単位互換制度の開始など、今日、日本の大学間でも採用されるになってきた独創的施策も、先駆けて実現されました。

しかし、私達にとってなによりも重要なことは、手島孝先生が、九州大学法学部教授の地位を投げ打って、総合管理学部の創設に邁進されてこられたことであり、この背景には先生の永きにわたる憲法・行政学者としての、日本の社会科学教育・研究体制への批判と理念があったこということです。この理念は、

総合管理学部の「公共マインドと経営マインドの融合・統一としてのアドミニストレーション」という学部理念に結実しました（手島孝著『アメリカ行政学』、日本評論社、1995年、復刻版、あとがき、参照)。先生が研究を始められた弱冠22歳の若き日、1955年（昭和30年）7月から1956年8月まで、フルブライト奨学生として米国シラキューズ大学マクスウェル行政大学院に留学され、アメリカ行政学の研究から芽生えたこの理念は、先生が、日本の憲法・行政学の大家として、アメリカとあわせてドイツ行政学の研究を深められることにより、現代日本の社会科学のあり方を提示するという実践的結果を生み出したのです。まさに学問と実践の総合という知性の見事な営為に驚かざるをえません（手島孝著『総合管理学序説』、有斐閣、1999年、参照)。

1996年4月に総合管理学部が創設された時、日本において、社会科学の総合性の重要性に基づいて創設された学部は、慶応大学総合政策学部などわずかでした。それが、今日では、50学部を超える勢いになっています。それらの中にあって、私達の総合管理学部はその先駆性と独自性において、注目を浴びる存在であることは言うまでもありません。また、総合管理学の基軸概念である「アドミニストレーション（administration」は、英語の辞書では、「all the activities that are involved in managing and organizing the affaires of a company, institution etc」（LONGMAN DICTIONARY OF CONTEMPORARY ENGLISH, 1995）と説明されるように、私達の総合管理学部は、社会科学の総合性において、社会活動の経営と組織化に焦点を当てているところ独自性があると言えます。手島孝先生が総合管理学部を創設され、九州の熊本県に、現代日本の社会科学の改革の狼煙をあげられたのも、明治維新における熊本の思想家、横井小楠に思いを馳せることができるでしょう。日本の社会科学が法学・行政学、経済学・経営学、社会学の蛸壺にこもることなく、融合・統一を目指すべきであると提唱される先生の総合管理学を継承し、さらには現代の目覚しい情報科学をも包摂した総合管理学を発展させることは、私達、総合管理学部の次世代の教員の課題です。先生の哲学・思想に思いを馳せ、現代社会科学の課題に立ち向かいたいと祈念する次第です。

先生は今、学長の激務から解放され、再び研究のための鋭気を涵養されてお

られますが、これからも、総合管理学体系の発展に向けて、さらなる御活躍を願ってやみません。ここに、総合管理学部教員一同の先生への感謝と敬意の思いを込めて、この『アドミニストレーション記念号』を捧げます。